

JISS

2015

仁川アジア競技大会 のサポート

マルチサポート・ハウス／診療・ケアサポート／科学サポート

[特集]

第11回JISSスポーツ科学会議

スポーツ科学、次へのステップ～ソチとこれからのサポート～

仁川アジア競技大会のサポート

MSH

マルチサポート・ハウス

リオに向けてのトライアル 4フロアに設置し一部サポートのデリバリーも

曾田 宗吾 (マルチサポート事業マルチサポート・ハウスチーム)

現在、継続しているマルチサポート戦

略事業はリオデジャネイロオリンピックまでの活動を一つの流れとして、MSHもそこでのサポートを最終目標に設定しています。仁川アジア大会でのMSHはリオデジャネイロオリンピックのトライアルという位置付けでした。情報戦略・医・科学サポートのワン・ストップショッピングという機能面のコラセプトは変わりませんが、スポーツ科学の進化による新たなサポートの取り入れや、選手・スタッフの入れ替わりに応じたオペレーション面でのトライアルという位置付けもありました。

仁川ではホテルの迎賓館(別館)をほぼ1棟借りることができ、開会1週間前から閉会式が行われた10月4日まで4フロアにわたってMSHを開設しました。ベース的にはかなり余裕があり、業務委託の外部スタッフも含め約40人体制で臨みました。また、リオMSHを想定したシャトルバスによるアクセスのトライアルも実施し、20分間隔で運行しました。アジア大会はオリンピックに比べて競技数、参加選手数も多いため、MSHの利用人数としては過去最高の延べ4273名となりました。ロンドンオリンピックと比較すると、利用者の内で選手の割合が増えました(約7割)。頻度に差はあります、MSHへ来館はぜひリカバリー・ールボックス(持ち出し用の補食)の利用だけという団体も含めると、全38競技団体

のうち36団体の利用がありました。

機能面でのトライアルとして今回最も重要なのは、JISSSのトレーニングエリアに稼働し始めたハイパフォーマンスジムの機能をいかに本番のサポートに取り入れるかということです。クライ

オセラピーに使用する大型の超低温リ

カバリーマシンを輸送し、現地で窒素ガスを調達するというオペレーションのトライアルを実行しました。また、トレーニングエリアもロンドンMSHよりスペースを広く確保し、トレーニング機器だけでなくパビジムというマットを設置して動作確認のトレーニングに有効活用しても

いました。アジア大会は、オリンピックまでの4年のスパンで考えると通過点

ではないかと思います。

大会後にアンケート等も取っています

が、リオデジャネイロオリンピックに向

てどうしていくかは、JOCや競技団体

とJSCなどで連携し検討していきます。

MSHを今回初めて使った選手も多い

ので、大会期間中だけでなく、物や人や

プログラムを含む日常のサポートの充実

に取り組むことが、MSHの活用につながると考えています。

復に望ましい食事内容を検討し、リフィ

ーディングボック

を計量後および試合当

日に提供しました。

MSHの設置もアジア大会、オリンピ

ックを通して4回目

ということで、どの

ようになどが整理されてい

る選手、競

技団体が出てきている

という印象で

す。試合前には何を、試合後には何を使

いました。シャトルバスで選手村のバス乗り場まで届けるというオペレーションでし

たが、MSHまで行かなくても受け取れ

るということでかなり利用されました。

MSHにおけるリカバリー・ールの対応は、広州アジア大会では持ち出し用の設

定ではなく、ロンドンオリンピックでは徒歩

圏内だったこともあり、選手がスタッフが

MSHまで取りに来てもうう形でした

ので、運用上では選手の活用を考えて

進化したと言えます。リオデジャネイロ

オリンピックでは、MSHを徒歩圏内に

設置することは立地や安全面から難し

いと思われるので、良いトライアルになつ

たと思います。

マルチサポート事業のターゲット競技

種目である柔道とレスリングでは、計量

後から試合までにいかに体重を戻すか

(リフィーディング)が課題となるため、

アスリート支援の栄養スタッフが体重回



仁川MSHのフロア配置図

- 3F 分析スペース
- ミーティングスペース
- 休憩コーナー
- ランドリー
- 2F スタッフルーム
- トレーニング
- 1F 受付
- ミール(食堂)
- B1F メディカルケア
- リカバリー・ール
- 高気圧カプセル
- クライオセラピー



広々とした食堂



広めに確保されたトレーニングエリア



動作確認トレーニングに活用された「パビジム」



ミーティングスペース



2014年9月から10月にかけて、韓国・仁川で開催されたアジア競技大会（アジア大会）。日本スポーツ振興センター（JSC）では、前回の広州大会に続いて設置したマルチサポート・ハウス（MSH）をはじめ、さまざまなサポート活動を実施した。

MSHは、文部科学省の委託事業であるマルチサポート事業の一環として、JSCスポーツ開発事業推進部がJISSと連携しながら設置したもので、今回はアジアパラ競技大会（パラ大会）においても、パラアスリートに対する初のサポート活動として、選手村内にMSHを設置した。また、JISSの科学サポートでは、主に陸上競技および水泳・競泳に対し、現地へ帯同しサポートを行った。

今回の仁川でのサポート活動は、1年半後に迫ったリオデジャネイロオリンピック・パラリンピックに向か、選手やサポートスタッフにとって大きな経験となったことだろう。

MSH
マルチサポート・ハウス

初のパラアスリートへのサポート オリンピック並みの機能を村内設置

四谷 高広（スポーツ開発事業推進部企画・推進課研究員）

今年度からパラリンピックのサポートが文部科学省に移管され、2014年9月からパラリンピック競技のマルチサポート事業が始まりました。仁川アジアパラ大会では、大きなチャレンジを三つ行いました。一つ目は、パラスポーツにおいて初めてサポート拠点という機能を設置したことです。二つ目は、MSHを選手村の日本選手団の建物内に設置したことです。三つ目は、パラアスリートに対し、オリンピックと同様のハイパフォーマンスにフォーカスしたサポート活動を行したことです。

仁川アジアパラ大会におけるMSHのコアセプトは、「リオデジャネイロパラリンピックに向けたトライアル」でした。

このトライアルとして、選手の身体的な負担軽減のために、選手村内の日本選手団に割り当てられた棟の1室にサポート機能を持ち込むことにしました。

これは日本パラリンピック委員会（JPC）の協力があつてこそ実現したことです。開設期間は、オリンピック同様の開村から閉会式まで行なうことができました。

パラスポーツ競技団体にとって初のMSHについて、大会前から大会期間中まで利用手順などの説明を行いました。利用者は延べリカバリープール78名、心理・コンディショニングチェック300名、栄養サポート311名、分析サポート61名という実績でした。

一方で、MSHスタッフは選手村にゲストバスを利用して入村したため、準備や片付けを考慮すると10時から19時までしかMSHを開設できないという制約がありました。利用が集中する夕方から夜にかけての時間帯では、マルチサポート事業ターゲット競技が優先となり、利用できない選手がいた点は今後の課題です。

具体的なサポート機能は、安全対策を最優先に対象や内容を精査した上で、リカバリー・コンディショニングおよび映像分析のスペースを設置することができました。心理や栄養のサポートは以前からJPCが実施している経緯を踏まえ、外部協力者としてサポートに協力いただいています。栄養サポートでは栄養士による選手村食堂の食事に関する情報収集や、食事の摂り方に関するコミュニケーションだけでなく、一部競技に対しても持ち出し用の補食であるリカバリーミールボックスの提供を行いました。

オリンピックMSHで多くのアスリートに利用されているリカバリープールも選手村内に設置し、予想以上に多くのパラアスリートに活用されました。手すりがあつた方が良いなど、使い方の面で今後の改善点も明らかとなっています。他国においても活用が進んでいる冷水と温水の交代浴は、個々への対応が必要なパラアスリートに対して、効果的な利用方法などのプログラム開発を進めいくことが必要です。今回は一部のバ

クの機能を持ち込むという試みを行いました。パラアスリートにはスポーツ医・科学に触れる機会が少なかつた選手がいる一方、十数年も最前線にいてハイレベルなことをどんどん取り入れたいという選手もいます。また、オリンピック選手に比べて年齢層や競技歴も幅広いので、サポートのバランスがオリンピックより難しいかもしれませんと考えていました。しかし、大いに活用されたMSHの結果を受けて、パラアスリートもオリンピック選手と同じようにハイパフォーマンスのサポートを求める意識がとても強いのだと感じています。

現在、パラアスリートのJISS・NTCの利用について議論が進んでいます。MSHが非常に多くの選手・スタッフに活用されたことは、この動きの大きな後押しになったのではないかと思います。我々の意識も変えなければいけません。また、パラアスリートの中にもスポーツ医学に目覚めた面があると思います。

MSHと連動してアスリート支援という日常的なサポートが始まわり、競技団体を通してパラアスリートに今後どのようにサポートの利用を広げていくかが課題となっています。

パラ大会のMSHで推奨したりカバリー・コンディショニングサイクル



設置内容

栄養・心理ブース
カウンセリングルーム
トレーナールーム
リカバリー・プール
分析スペース
コミュニケーションスペース

